

教育研究業績書

2016年10月01日

所属：薬学科

資格：助教

氏名：本田 千恵

研究分野	研究内容のキーワード
機器分析	構造解析、分子モデリング、分岐シクロデキストリン
学位	最終学歴
博士（薬学）	武庫川女子大学 薬学部 薬学科 卒業

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 薬剤師		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
3 学術論文				
1. Preparation of branched cyclomaltoheptaose with 3- α -L-fucopyranosyl- α -D-mannopyranose and changes in fucosylation of HCT116 cells treated with the fucose-modified cyclomaltoheptaose	共	2013年6月	Carbohydr. Res., 374, 49-58	Kimura, M., Masui, Y., Shirai, Y., Honda, C., Moriaki, K., Imai, T., Takagi, U., Kiryu, T., Kiso, T., Murakami, H., Nakano, H., Kitahata, S., Miyoshi, E. and Tanimoto, T. フコシルマンノース修飾 β -シクロデキストリンの合成とフコース修飾 β -シクロデキストリン類と大腸がん細胞HCT116のフコシル化の変化に関して検討した。
2. Preparation, characterization, and biological evaluation of 6 ^{1,6} -di- α -L-fucopyranosyl-(1-6)-2-acetamido-2-deoxy- β -D-glucopyranosyl]-cyclomaltoheptaose and 6- α -L-fucopyranosyl-(1-6)-2-acetamido-2-deoxy- β -D-glucopyranosyl]-cyclomaltoheptaose	共	2011年9月	Carbohydr. Res. 346, 1792-1800	Nakagawa, T., Nishi, Y., Kondo, A., Shirai, Y., Honda, C., Asahi, M., Tanimoto, T. フコシルマンノース修飾 β -シクロデキストリンの合成を行い、ヒト肝癌内来細胞株HepG2の形態変化に及ぼす影響について検討した。
3. Determination of Branched β -Cyclodextrin-Prostaglandin Complexes Using Electrospray Ionization Mass Spectrometry	共	2008年08月	Biosci. Biotechnol. Biochem. 72(8), 2164-2169	N. Yamane, Z. Tozuka, Y. Okada, C. Honda, Y. Nishi, T. Tanimoto β シクロデキストリン類とプロスタグランジン類との包接複合体のESI-MSによる検出法を確立した
4. Screening of Bitterness-Suppressing Agents for Quinine: The Use of Molecularly Imprinted Polymers	共	2005年02月	J. Pharm. Sci.	TAZUKO OGAWA, KAORI HOSHINA, JUN HAGINAKA, CHIE HONDA, TOSHIKO TANIMOTO, TAKAHIRO UCHIDA
5. (学位論文) プリオノール酸誘導体の立体配座に関する研究	単	2004年03月		本論文は、多くの生理活性及び薬理活性を有するプリオノール酸誘導体の立体配座をX線結晶解析、分子力場計算法、NMRを用いて詳細に検討を行ったものである。本研究の成果は、今後関連化合物が医薬品として開発される際、構造活性相関を考察する場合

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
6. Crystal Structure of Acetyl 29-Methyl-29-methylidene-D:C-friedoolean-8-en-3 β -ol		2003年03月	Anal. Sic. 19巻	に有用であると推察される。全 (pp.72) (本田・上裕・三輪) プリオール酸誘導体についてX線結晶解析を行い、立体配座を明かにした。全 (pp.473~474)
7. Relative Population of S-Form and F-Form Conformers of Bryonolic Acid and Its Derivatives in Equilibrium in CDCl ₃ Solutions	共	2002年04月	Chem. Pharm. Bull. 2002版 50巻 4号	本田・諏訪・竹山・上裕 ヘチマ培養細胞から単離したプリオール酸から、20種類のプリオール酸誘導体の合成を行った。そして、それら誘導体類の溶液中における特徴的な立体構造を分子力学計算および各種NMRスペクトルの解析により明らかにした。全 (467~474)
8. 9H-fluoren-9-ones from Dendrobium plicatile	共	2002年	Natural Med., 56, 157	Chie Honda, Masae Yamaki 生薬石コクより9H-fluoren-9-oneを単離し、各種スペクトルデータの解析により構造を明らかにした。
9. Stilbenoids from Dendrobium plicatile. 2.	共	2001年	Natural Med., 55 68-70	Chie Honda, Masae Yamaki 生薬石コクより新規stilbenoidを得、各種スペクトルデータの解析により構造を明らかにした。
10. Stilbenoids from Dendrobium plicatile	共	2000年04月	Natural Medicines 55巻 2号	本田・山木 生薬石コクより新規のstilbenoidを得、各種スペクトルデータの解析により構造を明らかにした。
11. Phenanthrenes from Dendrobium plicatile	共	2000年04月	Phytochemistry 53巻 8号	本田・山木 生薬石コクより3種の新規フェナンスレンを単離し、各種スペクトルデータより構造を決定した。担当 (pp.987~990)
12. Phenanthrenes from Dendrobium plicatile	共	1999年	Phytochemistry 53巻 8号	本田・山木 生薬石コクより3種の新規stilbenoidを単離し、各種スペクトルデータの解析によりそれらの構造を決定した。全 (pp.4)
13. The sterols and triterpenoids from Bletilla striata	共	1997年10月	Natur. Med 51巻 5号	山木・本田・加藤・白・高木 白及の低極性部より数種のsterolおよびtriterpeneを単離し、各種スペクトルにより同定した。全 (pp.493)
14. THE STILBENOIDS FROM DENDROBIUM PLICATILE	共	1996年09月	Phytochemistry 43巻 1号	山木・本田 生薬セッコクとして用いられるDendrobiumplicatileより新規のphenanthrene dimerを得、各種スペクトルにより構造を決定した。全 (pp.207~208)
15. Biosynthesis of the acetylenic compounds in cultured cells of Asparagus officinalis from D- and [¹³ C]-labelled phenylalanines.	共	1996年05月	Biol. Pharm. Bull., 19巻 5号	寺田・諏訪・竹山・本田・上裕 Dおよび[¹³ C] 標識化合物を用いてアスパラガスの培養細胞のフェノール性代謝物の生合成経路について検討し、スピロフラン型中間体の存在を推定した。全 (pp.748~751)
16. Phosphodiesterase I in cultured cells of Mentha arvensis	共	1995年05月	Phytochemistry 1995版 39巻 5号	中林・下・本田・上裕・木村 日本ハッカ培養細胞よりアルカリ性ホスホジエステラーゼ I を精製し、分子量などの酵素化学的性質についてニンジン由来の酵素と比較した。
17. Acetylenic Compounds Isolated from Cultured Cells of ★Asparagus officinalis☆	共	1995年04月	CHEMICAL & PHARMACEUTICAL BULLETIN 43巻 4号564-566頁	寺田・本田・諏訪・竹山・奥、上裕 アスパラガス培養細胞よりアセチレン結合を含む新フェノール性成分を単離し、それらの構造を各種スペクトルデータにより決定した。
18. Production of an AntiAllergic Triterpene, Bryonolic Acid, by Plant Cell Cultures	共	1993年02月	Journal of Natural Products 56巻 2号	田端・田中、趙、宇野、島倉、伊藤、上裕、本田 ヘチマ培養細胞が大量に生産するプリオール酸の培養細胞内での生合成機構および貯蔵、運搬機構を解明した。(pp.165-174)
19. AntiAllergic Effect of Bryonolic Acid from ★Luffa cylindrica☆ Cell Suspension Cultures	共	1991年12月	Planta Medica 57巻 6号	田中、宇野、秋元、田端、本田、上裕 ヘチマ培養細胞により特異的に産生されるプリオール酸を抗炎症、抗アレルギー活性について市販のグリチルリチン製剤と比較。プリオール酸は対照薬に比べて薬理効果、副作用の両面で優れていることを明らかにした。(pp.527-530)

その他

1. 学会ゲストスピーカー

2. 学会発表

1. 多分岐フコース修飾 β -シクロデキストリンの合成	共	2013年09月	シクロデキストリンシンポジウム	木村円香, 増井 有希, 本田千恵, 濱口良平, 黒田幸弘, 谷本敏子
2. フコシルマンノース修飾 β -シクロデキストリンの調製と癌細胞との相互作用	共	2011年3月	第131年会 日本薬学会	木村円香, 森脇健太, 白井優子, 本田千恵, 今井拓, 村上洋, 中野博文, 北畑寿美雄, 三善英知, 谷本敏子
3. プロスタグランジンと分岐 β -シクロデキストリン包接化合物による立体構造解析	共	2005年9月	第23回シクロデキストリンシンポジウム	山根尚恵, 本田千恵, 谷本敏子 プロスタグランジンと分岐 β -シクロデキストリン包接化合物の最安定構造を分子モデリングにより検討した
4. Study of Prostaglandin-Branche	共	2005年6月	53RD ASMS Conference	Naoe Yamane, Chie Honda, Yuki Nishi, Zenzabro T

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
て				
20. プリオノール酸誘導体の立体構造と抗I型アレルギー活性	共	1994年03月		抗アレルギー活性を示すプリオノール酸の活性本体を明らかにするため、プリオノール酸肝代謝産物の薬理作用の探索と [$<14>^14\text{C}$] で標識したプリオノール酸を用いて代謝物の化学的解析を行った。 宇野、田中、田端、本田、上裕 ヘチマ培養細胞が産生するbryonolic acid誘導体のうち 3β -succinyl bryonolic acidは、I型アレルギーに対し高い抗アレルギー活性を示す。その29位を置換して、D,E環の立体配座の異なる誘導体類を合成し、構造活性相関を比較した。(pp.169)
21. ウリ科培養細胞におけるプリオノール酸の生合成と輸送	共	1993年07月		田中、高尾、伊藤、島倉、趙、田端、本田、上裕 ヘチマおよびスイカの培養細胞内におけるプリオノール酸の生合成、輸送機構ならびに細胞への蓄積機構について検討した。(pp.2)
22. プリオノール酸の関連化合物の立体配座	共	1991年10月		本田、堀山、諏訪、上裕、三輪、多賀 数種のプリオノール酸誘導体を合成し、それらの立体配座をX線結晶解析および各種NMRの測定結果により解明した。(pp.67)
23. アスパラガス培養細胞のフェノール成分について	共	1991年10月		寺田、本田、堀山、諏訪、上裕 アスパラガス培養細胞によりアセチレン結合を含む新フェノール性成分を単離し、それらの構造を各種スペクトルデータにより決定した。
24. プリオノール酸の培養生産と抗アレルギー作用	共	1991年07月		田中、宇野、島倉、趙、福井、田端、本田、上裕 プリオノール酸コハク酸エステルのカリウム塩は、経口投与で即時型アレルギーと遅延型アレルギーの両方に有効であり広い抗アレルギー活性スペクトルを有する化合物であることを明らかにした。(pp.29-32)
25. プリオノール酸誘導体の抗アレルギー作用について	共	1991年03月		宇野、田中、田端、本田、上裕 7種のプリオノール酸誘導体について抗アレルギー活性を検討し、プリオノール酸コハク酸エステル(カリウム塩)が最も強い活性を示すことを明らかにした。
26. 糸瓜(ヘチマ)培養細胞の特異成分と薬理活性	共	1989年05月		田端、田中、上裕、本田 ヘチマ培養細胞により特異的に産生されるプリオール酸が優れた抗炎症、抗アレルギー作用を有することを明らかにし、これが有望な天然薬物素材であることを示唆した。
3. 総説				
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
学会及び社会における活動等				
年月日				事項